今昔 事務職員像

池内 啓三
●関西大学理事長

●単純作業に明け暮れ

事務職員が「事務屋さん」と呼ばれていた昭和四十年に、小生は関西大学の事務職員として採用された。初任給は三万一二〇〇円であったと記憶している。

当時、計算は「そろばん」、公文書はタイプ室の専門家が打つ縦書きの「タイプ印刷」か「ペン書き」であったし、ときには「毛筆」であった。試験問題は「ガリ版刷りの謄写印刷」であった。

「電話交換手」「タイピスト」「運転手」「用務員」などの技能・技術職の方々が、それぞれの領域で持ち場を守っており、新任職員は、これらの方々から指導や叱責を受けながら、定型的な業務に追われていた記憶がある。

昭和四十五年ごろから、いわゆる青焼きの「湿式コピー」が導入されて、業務の流れが大きく変わった。乾くのに時間を要したが、それでも大変なスピードアップであった。

そのころ、就職課に在籍していた小生は、企業から送られてくる資料から求人情報をせっせと書き取り、「求人票」を作成して印刷し、掲示板に貼り出す。それを見た学生が応募してくると選考し、応募書類を企業あて郵送する。来る日も来る日も、これらの業務を黙々と繰り返していた記憶がある。

●求められる高い能力や人間性

時代は変わり、本法人が今年度の事務職員の募集要項に記載した求める人材とは、①誠実で信頼の置ける人、②社会の役に立つことを生きがいにできる人、③人に気配りしながら、しっかりとしたコミュニケーションをとれる人、④多角的視点に基づく企画力をもち、バランス感覚に優れた人、⑤法律知識、語学力、ＩＴ技術等の専門能力を創造的に活用できる人、である。

①～③は、昔も今も変わらないが、④⑤は今や必須である。そのうえ、⑤の語学力やＩＴ技術に関しては、かなり高いレベルが求められる。

採用されるだけでも大変なことなのに、一番の苦労は、二、三年もすれば、入れ替わりの激しい非正規職員への指導や指示をすべて任されることになることだろう。まだまだ自分のことで精一杯なのに、高い指導力まで要求され、パンクする人が出かねない。

●人事制度改革

以上のように、事務職員という職種は、昔と比べるとはるかに多くのことを求められるようになった。こうした変化は当然、大学を取り巻く環境の著しい変化の中でもたらされたものである。

小生が総務局長を命じられた十五年ほど前は、大学設置基準の大綱化などを受け、大学改革論議が花盛りであった。本学もご多分に漏れず、「改革の本丸」として「職員人事制度再構築」に取り組んだ。

その目的は、時代の変革に対応し、本学が将来にわたって発展し続けるよう人材の育成と有効活用を図り、適切な処遇を行うことであった。

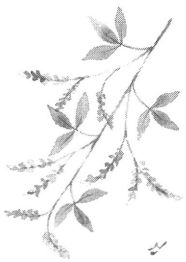
具体的には、職能資格、人事考課、目標管理、能力開発等の諸制度を見直し、新たな賃金制度を導入して、平成十四年度から新人事制度をスタートさせた。あれから十年、時代の変化に伴うさらなる改革が今、求められている。

●真の教職協働を目指して

今日の私学運営の要諦は「教職協働にあり」と言われている。教育職員に対しては、「大学マネジメントのあり方」を本格的に研究・実践する仕組みづくりが求められていると考えるが、ここでは詳細は省くこととする。

一方、事務職員については、教学支援や研究支援あるいは学校会計や関係法令をはじめとする専門知識や技能を身につけることによって、教育職員や学生の信頼を得、学校運営のプロとして調整力やコーディネート力を発揮しなければならない。自分たちが大学を支えるのだ、という自覚と誇りをもつことが何よりも重要であると考える。

このように見てくると、今、そしてこれからの「大学事務職員」という職種は、大変発展性のある、やりがいのある職種であると思うのだが、読者の皆様はどうお考えであろうか。



ずいそう